SAFETY REPORT Vol.2

抗がん薬曝露対策が生み出した新たな価値

京都大学医学部附属病院

山中寛惠さん（看護部 副看護部長）
浜辺陽子さん（看護部 病棟副師長［外来科学療法室］）
石橋直哉さん（薬剤部 がん専門薬剤師）

スタッフの信念が目指したものは安全のその先……安心がもたらす本当の価値とは

抗がん薬の曝露対策に取り組まなくてはいけないと思いながら、なかなか一歩を踏みだせない――そのような施設は多いのではないでしょうか。京都大学医学部附属病院では〝ある経験〟が大きな刺激となり、活発な活動をスタート。2年半後には抗がん薬曝露防止器具の導入を果たしました。この導入は同院に新たな価値を生み出しています。

曝露対策に取り組む施設を見学

京都大学医学部附属病院の看護部が抗がん薬曝露について強い問題意識を持ちはじめたころ、妊娠していたり、妊娠を希望する看護師から化学療法室での勤務を敬遠する声が聞こえ始めていました。当時、同院では、薬剤部で一部の抗がん薬調製において、曝露対策のための調製用器具が導入されていましたが、投与時の対策は充分には取られていませんでした。そうした折、2014年5月に厚生労働省より「発がん性等を有する化学物質を含有する抗がん剤等に対するばく露防止対策について」という通達が発出されます。「この通達は私たちが行動を起こす大きなきっかけとなりました」と話すのは同院看護部副看護部長の山中寛惠さんです。

山中さんはがん化学療法看護認定看護師の浜辺陽子さん、がん専門薬剤師の石橋直哉さんたちとともに同年8月、「抗がん薬曝露防止対策ワーキンググループ」（以下、ワーキンググループ）を結成します。山中さんたちがその最初の活動として選んだのが、すでに曝露対策に取り組んでいる他の大学病院の見学でした。

「当院と異なり、その病院のレジメンは非常にシンプルで、当院に取り入れるためにはいくつかの課題があることがわかりました」（山中さん）

「その病院では曝露防止器具を全病棟で導入していま

高さ」と山中さんは言います。

「執行部がかかる費用に難色を示しても、私自身、諦めずに何度も説得を重ねたのは、『絶対に曝露対策をしなくてはいけない。そのためには、この器具が必要』という現場の強い信念があったからこそ。その熱意が伝わったのだと思います」

ワーキンググループメンバーが見学に行った大学病院と同様、抗がん薬曝露対策に正面から取り組む施設となった京都大学医学部附属病院。今度は同院の成功に刺激を受け、後に続く医療機関が出てくるに違いありません。

国立大学法人 京都大学医学部附属病院 *Kyoto University Hospital*

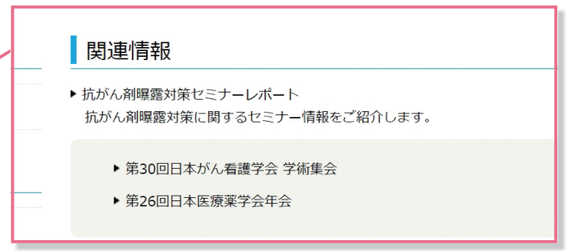
提供：京都大学医学部附属病院

開　　設	1899年7月、京都帝国大学医科大学附属医院を開設。
所 在 地	京都府京都市左京区聖護院川原町54
病 床 数	1,121床
職 員 数	約3,200名
診療科目	内科（血液・腫瘍内科、糖尿病・内分泌・栄養内科、循環器内科、消化器内科、呼吸器内科、呼吸管理睡眠時無呼吸、免疫・膠原病内科、初期診療・救急科、神経内科、てんかん・運動異常、腎臓内科、がん薬物治療科、緩和医療科）、外科（消化管外科、乳腺外科、肝胆膵・移植外科、小児外科）、眼科、産科婦人科、小児科、皮膚科、泌尿器科、耳鼻咽喉科・頭頸部外科、整形外科、精神科神経科、歯科口腔外科、放射線科（放射線治療科、放射線診断科）、麻酔科、脳神経外科、形成外科、心臓血管外科、呼吸器外科、リハビリテーション科、病理診断科、外来がん診療部、リウマチセンター、女性のこころとからだの相談室、漢方診療ユニット

抗がん剤曝露対策に関する セミナーレポートをWEBで公開しています

JMS ネオシールド　SEARCH

ネオシールド｜製品関連情報｜JMS医療関係者向けサイト
http://medical.jms.cc/diagnosis/ns/index.html



製造販売業者
株式会社 ジェイ·エム·エス
http://www.jms.cc/

■お問い合わせ先
東京本社 ホスピタルプロダクツビジネスユニット営業部
〒140-0013 東京都品川区南大井1丁目13番5号 新南大井ビル

2017.01.03XA203-HS

山中寛恵 副看護部長

した。どのような過程を経て導入できたのか、導入時に混乱はなかったのかなどの話をレクチャーしていただき、とても参考になりました」（浜辺さん）

「他の病院の様子を見ることで、当院はどういう器具を導入すればよいのか、そのためにはどのような課題を解決しなければいけないのかなどがよくわかりました」（石橋さん）

この見学は山中さんたちにこれからの自分たちが進むべき方向性を示してくれる貴重な経験となりました。同時に、皆の心の中に大きな“闘志”がわいてきたと言います。「必ず曝露防止器具を導入しよう――」。

山中さんたちの活動が本格化します。

曝露防止器具の導入を病院に申請

同年10月にワーキンググループの第1回ミーティングを開催、翌月からメンバーを拡大するとともに、院内の抗がん薬レジメン委員会のワーキンググループとして正式に認められました。

ワーキンググループでは、曝露防止器具を全病棟に導入するのか、あるいはリスクの程度に応じて部分的に導入するのか、導入するとしたらレジメンをどう変更するのか、どの器具が使いやすいのか、どのような手順で教育を行っていくのかなど、細部にわたって検討していきました。

「器具導入でもっとも大きな障壁となるのが費用であることは明らかでした。投与の曝露対策について診療報酬はありません。そのため対策にかかる費用はすべて病院の負担となります。しかも、当院の抗がん薬投与件数は膨大なので、かなりの費用になります。気持ちも意識もあるだけに、現場は悶々としていたと思います」。山中さんたちが予想したとおり、器具購入を病院に申請したときに最初に言われた言葉は「こんなに費用がかかるのですか……」。

しかし、山中さんたちは決して諦めませんでした。説得を重ねます。

「曝露対策ができていないがために化学療法室に看護師が行きたがらないのは患者さんにとって大きな不利益となります。導入費は大きいけれど、職員一人あたりに換算すればそれほどでもありません。それで患者さんに良い看護が提供でき、かつ職員が安心して働けるならば、それだけのお金を出す価値がある、と訴えました」（山中さん）

こうした山中さんたちの主張が認められ、器具の導入が決定しました。ワーキンググループが発足してからおよそ2年半後の2016年12月のことでした。

導入に伴いレジメンを見直す

導入に伴ってワーキンググループが取り組まなければならない事項は山積していました。中でも、レジメンの見直しは重要でした。石橋さんは「当院のレジメンの数は1,000以上。それを一つひとつ見直し、修正していくのですから、大変な作業でした」と振り返ります。しかし、複雑だったレジメンはかなりシンプルなものになり、「わかりやすくなった」と職員たちの評判は上々だそうです。

導入に当たり、ワーキンググループは全職員を対象に研修を行いました。石橋さんは抗がん薬曝露の危険性や曝露対策の必要性について、浜辺さんは具体的な投与管理についてそれぞれ説明を行いました。以来、職員の意識に変化が現れてきました。

「看護師たちは、抗がん薬曝露は怖いと認識するようになり、これまで以上に防護具の着用を徹底するようになりました。また、これまで着用せずに抗がん薬を投与していた小児科の医師が、防護具を着用するようになりました」（浜辺さん）

浜辺陽子 看護師

今回導入した器具は使い方が簡単だったため、これといった混乱もなく、看護師たちに受け入れられました。「むしろ、手間がかからず楽になった、投与の作業時間が短縮され、その分、本来の看護の仕事を行えるようになったなどと好評です」と浜辺さんは言います。

職員の安心･安全に配慮する病院

もう一つ、治療の現場とは異なるところで、新たな効果が得られました。職員にとって「安心・安全な職場環境をつくる病院」という“価値”が生まれたことです。

「今年の春の就職説明会から、曝露対策にしっかりと取り組んでいるということを紹介しています。すべての抗がん薬に対して曝露対策に取り組んでいる医療施設は全国でもまだそれほど多くないので、就職希望者に大きな関心を呼ぶところだと思います。また、すでに昨年度の看護師の離職率がこれまでよりも2～3%低くなりました。この活動だけではないでしょうが、安心・安全な職場環境をつくってくれる病院であれば、職員のロイヤルティも高まり、働き続ける人が増えていくのではないでしょうか」と山中さんは喜びます。

職員の離職率は病院にとって大きな経営課題です。同院で働く看護師数はおよそ1,200名。採用に掛かる費用を考えるとその2～3%、30名ほどの離職を抑えられるということは、病院に大きな経済的プラスをもたらします。また、患者さんにも安定した質の高いケアを提供し続けられるということでもあります。

実は、山中さんは曝露対策に取り組むことはこの経営課題に取り組むことにつながると当初から確信していました。執行部から器具の導入費が高いと言われたとき、山中さんは「きっと看護師の離職率を下げます。この導入は離職率の問題に先手を打つ投資です。この価値は高いと思います」と力説したと言います。

現場の熱意が病院を動かした

石橋直哉 薬剤師

導入が決まり、ワーキンググループは看護師が着用する防護具やベッド周辺などの抗がん薬曝露の拭き取り調査をしました。「職員が操作に慣れてきたころに再度調査をし、導入前と比較することで曝露防止器具導入の評価を行うつもりです」（石橋さん）

看護部でも今後、さまざまな研修を通して、抗がん薬曝露についての知識を深めていく予定です。

「当院では師長の推薦を受けた中堅看護師を対象にレベルアップ研修やエキスパート研修が用意されています。これらの研修プログラムの中に抗がん薬曝露対策を盛り込みます。受講した中堅看護師が自分の各部署で他のスタッフに情報を伝えることで全体に広がっていくことを狙っています」（浜辺さん）

今回の導入成功のいちばんの理由は、「現場の熱意の